

一目でいい。

叶うのなら、また逢^あいたいと願った。

だから——

ゾイカルやみひめ -結-

目覚めると見慣れた天井があった。

自分の部屋なのだから当然だろう。昨日は〈機獣少女〉の仕事があり、珍しく疲れたので早めに寝たのだ。おかげで目覚ましは鳴るより、少し早く起きてしまった。

「……………」

そのはずだ。

間違いない——と思うのだが、なにか違和感がある。

少女の名前はツバキ・タカチホ。

前述の通り〈機獣少女〉をしている以外は、ごく普通の小学五年生である。

「……………？」

改めて部屋を見渡す。自分の部屋のはずなのに、外泊先で目覚めた時のような感覚がある。まだ寝ぼけているのかもしれない。

枕元の時計は六時十五分を指している。日付は十月二十八日。

(なんだろう。昨日——二十七日は何か大きな出来事があったような……)

〈カラストロ〉との戦闘はあったが、〈機獣少女〉である彼女には特別珍しい事ではない。

違和感を抱えたまま、ツバキは登校前の身支度を始める。顔を洗って意識がはっきりしても、正体不明の違和感は消えてくれなかった。



リビングに行くと、普段通りに母親が朝食を用意してくれていた。

「——おはよう、ツバキ。昨日は早く寝たのに、いつも通りの時間ね」

普段通りに母親が声をかけてきた。彼女は毎朝、ツバキより早く起きて朝食を用意し、学校に送り出してくれる。

早くに夫と死別し、それでもこうして女手一つで育ててくれている母親を、ツバキはとても誇らしく思っている。

「……………」

そのはずなのに、なにもおかしい事などないはずなのに、違和感が膨らんでいく。

「ツバキ？ どうしたの…………？」

「あ、いいえ…………なんでもありません」

「…………どうしたの？ そんな他人行儀な言い方」

娘の様子がおかしいと感じたのか、母親は不安そうな表情を浮かべる。

「え？ そう、かな……そうだね。ごめんね。なんでもないから」
「本当に？ 無理してない？」

「大丈夫だよ。でも、あんまり食欲ないから、今日は飲み物だけにする」

「そう……あ、ヨーグルトがあるけど？」

「うん。もううね」

わざわざヨーグルトの蓋ふたを開け、スプーンと一緒に手渡してくれる優しさが嬉しいはずなのに、ツバキはその母親にも違和感を覚えていた。



家を出て、朝の通学路を進みながら、ここ数日の出来事を思い返す。

ツバキが地球から惑星セヘナに帰還し、諸々の事後処理を済ませ復学し、もう二週間以上が経った。別の星に転移するということんでもない体験をしたが、さすがに平常運転に戻っている。

それくらい普段通りの日常だった。

「……………」

だが、本当にそうなのだろうか。

今朝の通学路も、校門に立っていた教師も、教室の様子も、なにもかもが普段通りのはずなのに、ツバキを漠然とした違和感が苛さいなむ。

「——おはよう、タカチホさん」

自分の席に着いてランドセルを下ろし、教科書などを出していると、クラスメイトの小柄な少女に声をかけられた。ツバキも平均よりは小柄な方だが、彼女は更に小さい。

スマイレ・ヒノカゲ。

〈機獣少女〉の仕事で学校を休む事もあるツバキを、普段から学級委員だからと気にかけてくれていたが、仲良くなつたのはつい最近だったりする。

「……ヒノカゲさん。おはようございます」

よかった。スマイレに対してはなんの違和感もない。

「？ どうかしたの？」

「いえ、ヒノカゲさんはいつも通りだったので、なんだかほっとしてしまっただけ」

正確には、ツバキが勝手に周囲に違和感を覚えているだけなのだが。事情を知らないスマイレは当然、きょとんとしていた。

「そうだ。あの噂、本当なの？」
〈獣王シユウオウ〉と〈竜帝リュウテイ〉が『卒業』するって

クラスメイトの意図の読めない発言よりも、スマイレには気になる事があったらしい。彼女が言っているのは〈機獣少女〉のアイナ・ボーグマンとルイゼ・ルンシュテッドの事で、いわゆる『二つ名』持ちの有名人である。ちなみに『卒業』とは引退の事を指す。

「私も噂でしか知りませんよ。事務所が違うので」

「じゃあ、これは？ 〈FA：Gエンタテインメント〉が、有望な新人を集めてユニットを組ませてデビューさせるらしいわ。たしか……〈MG Mデバイス〉とか」

やや鼻息を荒くして迫ってくるスマイレ。ひょっとして〈機獣少女〉オタクなのだろうか。〈機獣少女〉は〈ジエネレーター〉を〈カタストロ〉から防衛するための守護者だが、東方大陸ではアイドルとしての側面も強く、女性のファンも多い。

「さ、さあ……。他事務所の事は、本当によく知らないです」

「そう。ま、そりゃそうよね」

ツバキの答えにがっかりした様子もなく、スマイレはあっさりと引き下がった。こういうサバサバしたところに好感が持てる。

「ねえ、なんでタカチホさんは今の事務所に入ったの？」

「え——？」

「あ、ただの好奇心だから、別に無理には聞かないけど」

複雑な事情がある可能性を考慮して、逃げ道を用意してくれる。踏み込んで来るけど引き際も心得ている。スマイレは戦場で長生きするタイプかもしれない。

「誘ってくれた先輩がいるんです。カナ——」

一瞬、長い黒髪で静謐な雰囲気せいひつの綺麗な少女がちらついていた。

違う。ミズキ・オイカワは黒髪だがショートで、明るい印象が強く、綺麗というより可愛らしい感じだ。しかし口から無意識に出かけた名前はミズキではなく——

(……私、誰と間違えたの?)

『カナ』と付く名前の先輩に心当たりはない。

そもそも、本当に自分を誘ってくれたのはミズキだったか？

「——あ、席に戻らなきゃ。続きは後で聞かせて」

「え？ あ、はい」

担任の教師が教室に現れたため、話は中断し、そのまま朝のホームルームとなった。



漠然とした違和感が残ったまま放課後を迎えた。

スマイレとは校門で別れ、その足で事務所に向かう。ミズキは予備役となっても、事務員として今も仲間を支えてくれている。今日は来ているはずだ。

「けど、行ってどうする？ ミズキさんに会っても記憶の違和感が消えなかったら……」
自然と足が止まる。

すると――

「――《難攻不落》！」

聞き覚えのある声が、高らかに夕暮れ前の往来に響き渡った。何かと道行く人々が視線を向ける。当然だ。声はツバキに向けられたものだから、巻き込まれるに決まっている。

「……こんにちは、ソウマさん」

「あんた！ 面倒なのに見つかったって思ったでしょ!？」

「……………いえ」

「メチャクチャ間があつたじゃない?! 私の目を見て言いなさいよー」

周囲の視線が痛い。関わり合いになるまいと遠巻きにされているのが、より痛い。

彼女はキリエ・ソウマ。

ツバキをライバル視している《機獣少女》で、見つかるとうろたえて絡んでくる。悪い人間ではないし、実害もないのだが、言葉を選んで言うとうろたえて――面倒くさい。

「……………あれ？ 本当に普段から、こんな風に絡まれてたっけ……………」

まただ。また違和感がある。そもそもキリエがライバル視していたのは、本当にツバキだったか？

「――ちよつとパイセン、なにこんな公衆の面前で大声出してんのよ？ 常識ないの？」

馬鹿なの？ 死ぬの？」

「リツ先輩、言いすぎですよっ」

頼もしい援軍が現れた。

リツ・ミナトとモカ・カワイだ。

二人ともキリエと所属事務所は違うが、最近では彼女のお目付け役として認識されている節がある。キリエは人格的に問題があり、周囲とトラブルを起こしがちな『困ったちゃん』だが、二人と付き合うようになって丸くなったというのが周囲の見解だった。

「あ、タカチホさん！ こんにちは！」

「こんにちは、カワイさん」

モカの子犬のような天真爛漫さに癒される。ツバキより学年は一つ上なのだが、妙に懐かれているのだ。

「あら、タカチホさん？ ……パイセン、また小学生に絡んでたの？ 友達いないからって、引くわ。ていうかこれ、事案じゃない？ 大丈夫？ 何もされてない？ 防犯ブザー、鳴らす？」

リツは淡々とキリエを批難し、ツバキに真顔で防犯ブザーを差し出した。黒いベリーショート、つんとした印象の美人である。高校生で、モカからは同じ事務所（機獣少女）の先輩として慕われている。

（ミナトさん、今朝のイメージの人に雰囲気似てる気がする……）

もちろん、ツバキを（オフィス・タカマガハラ）に誘ったのはリツではない。彼女は〈87プロデュース〉の所属で、移籍もしていない。

「タカチホさん、どうしました？ ……あ！ いくらタカチホさんでも、リツ先輩はあげませんよ!？」

無言でリツを見つめていたので誤解されたようだ。モカは彼女の腕に抱きつくと、ツバキを睨んで牽制した。驚くほど怖くないというか、むしろ微笑ましい。

「やだ、私ってばモテモテね。パイセン、羨ましい？」

「べ、別に羨ましくなんかないわよ!? 馬鹿じゃないの!？」

真顔で煽るリツにキリエが怒鳴る。

「心配しなくても、私もモカも財布——もとい、パイセンの事はちゃんと慕ってるわ」

「財布って言ったわね!? 散々集つといて白々しいのよ!」

「モカ、次はなに食べたい？ あ、今日はまだタピってなかったわね。タカチホさんも行きましようよ。大丈夫、パイセンの奢りだから」

『タピる』というのは流行語で、タピオカが入った飲み物の流行に起因する。タピオカ自体は昔からあったらしく、なぜ今になって流行ったのかは大人達の間でも謎らしい。

「ふざけないわよ!? 死ねばいいのに……!？」

キリエの怒号が響き渡る。すでに興味をなくしたのか、道行く人々は誰も足を止めていなかった。



キリエから解放されたツバキは、改めて事務所に向かう気にもなれず、途方に暮れていた。なにか忘れてる気がするのに思い出せない。

漠然とした違和感があるというだけでは、誰かに相談のしようもない。

「……………はあ——」

思わず溜息を吐く。

すると——

「——美少女の溜息というのは罪深いですね。なんとかしてあげたくなくなってしまいました」

聞き覚えのある声に、はっと顔を上げる。

魔女が二人、ツバキの目の前にいた。

タオエン・ファフロウとベアトリーチェ・ファフロウ。

地球から惑星ゼヘナにツバキを連れ帰り、事後処理にも付き合ってくれた恩人である。

二人は二週間ほど滞在すると、また旅立っていったはずだった。

『お二人とも、まだゼヘナにいらっしやったんですか？ それとも、なにか忘れものでも……………？』——そう言おうとして、しかし口を衝いて出た言葉はまるで違っていた。

「……………助けてください——」

言葉と共に涙が溢れた。

嗚呼、自分はこんなにも苦しんでいたのかと、ようやくツバキは理解した。

エピローグ

A New Beginning

タオエンさんの開いた『門』を抜け、地球の大地を踏む。
私は『ニホン』に戻ってきたのだ。

「本当に戻ってきたんですね。もう来る事はないだろうと思っていました」

三十分ほど前。

涙と嗚咽おえつが止まらなくなってしまった私の前で、ファフロウ姉妹は顔を見合わせると、姉のタオエンさんが何事か咳つばいた。それは異国の言語か呪文のようで聞き取れなかったが、直後に何かが頭の中に入ってくるような感覚を覚えた。それは圧倒的な量の情報と呼べるもので、よく正気を保っていられたと、今となっては思う。

その情報とは『改変される前の世界の記憶』だった。

信じられない話だが——今の世界は昨日書き換えられ、今日始まったのだ。

もちろん、今の世界で今日まで生きてきた記憶はある。それらの事実も、この世界では実際にあつたのだ。

同時に、私には以前の世界で生きた十一年分の記憶もある。これについては前世のようなもので、覚えていても特に世界にも自分にも弊害はないと、タオエンさんに言われた。

「前世の記憶があるって言う人、いるじゃない？ ツバキちゃんみたいに、改変前の記憶が残っちゃったのかもね」

「まあ、ほとんどは嘘か妄想でしょうけどね」

ベアトリーチェさんとタオエンさんが面白そうに言った。私は私で、世界改編の事実に驚きつつも、それを冷静に受け止めてしまっている事の方に驚いていた。朝から抱えていた違和感の理由が判明して、すっきりしたのかもしれないが。

「……これで良かったんでしょうか」

〈ブレイクス〉や〈ステインガー〉、そして〈ルイン〉による被害者は誰もいない。心を病んでしまった母親が元気になり、一緒に暮らしている。

誰も不幸になっていない。むしろ、以前の世界より幸せになれている。

それでも、こんな都合の良い事があつていいのか？

「やみ子ちゃんの声、聞いたよね」

「あの『声』は、やはりやみひめさんだったんですね」

「やみ子さんの声を聞いた皆が、『ちょっとだけいい明日』を夢見た。その結果が今で

す」

私だけの願望じゃない。皆が望んだ、『こんなはずじゃなかった世界』。それが表現した。

「でも、皆が理想の世界を願ったにしては、そんなに前の世界と変わってなくない？」

「幸せのカタチは人の数だけ存在します。それは時に衝突もする」

特定の人間だけの願いを反映すればまだしも、不特定多数となればそれらは相殺し合う。結果、改変前の世界で願った人間の思う幸せの平均が今の世界となった——というのが、タオエンさんの考えだった。

「……そう、ですよ。幸せになってもいいんですよ」

誰だってそうだ、幸せになりたい。

心を病んでしまった母親に元気になってほしい。また一緒に暮らしたい。そんな当たり前の願いなら、改変という手段で叶って後ろめたく感じる必要もないのかもしれない。

そう自分を納得させる。

だったら、気がかりなのは一つだけ——

「ありがとうございます、連れてきてくれて」

「どういたしました。元々、来る予定だったので、ついんです」

世界改編において、ファフロウ姉妹はほとんど影響を受けなかったらしい。気付けば改変後の惑星ゼヘナにいて、状況を見て回っていたそうだ。

「でもさあ、なんでツバキちゃんだけ、記憶の改変が完璧じゃなかったんだろう？」

移動しながら、ベアトリーチェさんが疑問を浮かべた。

「やみ子さんとの関りが深かったからかもしれません、正直、判りかねます」

タオエンさんはお手上げといった様子で答えた。彼女とて、なんでも知っている訳ではないのだろう。

「確認ですが、対象者を見つけた場合、まずは様子見。迂闊な接触は避けてください」

地球に行く前にも言われた、現地でのルールだ。実際、ファフロウ姉妹はゼヘナでもそうしてきたらしい。関わりのあった人達を観察し、判断がつかない場合は姿を晒し反応を見たが、誰も二人を気にも留めなかったそうだ。

つまり、私以外は完璧に改変以前の記憶が消えていた。そして、記憶の違和感に苦しむ姿を見かねたタオエンさんは、私の記憶を戻してくれた。

なぜ、彼女にそんな力があるのか。

ベアトリーチェさんの戦闘力についても同じだ。

〈エグゼキューター〉と名乗っていたが、二人はいったい何者なのだろう。

世界改編の影響を受けていない事も含め、改めて疑問に思ったが、結局、私は訊ねる事が出来なかった。

「——ねえ、あれ！」

不意にベアトリーチェさんが声を上げた。彼女が示す先には、もともと発見が難しいであろう人物の姿があった。

クラウ・P・ブランさんだ。

地球では、私が追っていた〈カタストロ〉に意識を奪われていた状態でしか面識がないため、彼女の住所も知らない。今日は祝日らしく、登校もしていないと思われるので、探すのは難しいと思っていたのだ。

「……まさか男性と御一緒とは」

「カレシかな？」

色めき立つ二人。だが、ブランさんは女子高生くらいに見えるが、実際にはやみひめさんのクラスメイト——つまり小学六年生。対して男性の方は大学生くらいに見える。ぱっと見はお似合いのカップルだが、ブランさんの年齢を知っていると、途端に犯罪臭がしてくる……。

「〔親戚……ではないでしょうか？」

半ば願望を口にし、私達は見つからないように、ブランさんと男性を追った。

断片的に聞こえた会話から、二人は街から戻って来たらしい。現れた方角から、恐らくバスを使ったのだろう。やみひめさんと橘たちばなさんに、街で買い物に付き合ってもらったの思い出す。

「どうやら本当に親戚のようです。学校や家族の話題ばかりですし、お二人の雰囲気も恋人ではなく兄妹のようです」

「タオエンさん、この距離で聞こえるんですか？」

私が驚くと、ベアトリーチェさんが茶化す。

「タオエン・イヤーは地獄耳なのだ。なんて、わたしも聞こえてるんだけどね」

そう言って、ベアトリーチェさんは頭部の猫のような耳を動かして見せた。タオエンさんもいつの間にか帽子を外していたが、誰も魔女のような格好に猫や狐のような耳を付けた二人に注目しないのは、認識阻害そがいの能力のためらしい。

「お相手の男性は『ハン』という名前で、二人で映画を観に行っていたようです。ご家族が忙しいとか、まあ、そういった内容です」

「お兄さんの方はそんな気なさげだけど、クラクラは好きなんじゃないかな」
『クラクラ』というのはブランさんの事だ。彼女とは親しくなる機会も持てず、個人的な事は何も知らない。最後まで『友達の友達』の関係でしかなかった。

互いに『ブランさん』『タカチホさん』とファミリィネームで呼び合っていたし……。

「地球に好きな人がいたんですね。だったら、ブランさんにとっても、今の状況は良かったんじゃないでしょうか」

「そうですね。妙なところもないようですし、クラウさんは問題ないでしょう」

「だね」

ブランさんにゼヘナに転移してからの記憶は残っていないと判断し、私達は移動した。

さようなら、ブランさん。

出来れば仲良くなって『クラウさん』と呼んでみたかったです。



巡り合わせとでもいうのだろうか。ブランさんに続き、すぐにまた目的の人物を見つ
けられた。それも全責だ。

やみひめさんと橘さん、そして――

「カナコさん……」

そう。元から異邦人である人物を除き、カナコさんだけが改変後の世界から消え、彼女に関する記憶も改竄かいざんされていた。

カナコさんは地球からの転移者で、橘さんの妹だ。だから、きっと今頃は地球で暮らし
ているはず――ゼヘナにいないのなら、そうであってほしいと願っていた。

その確認のために私は地球に来たのだ。

もちろん、やみひめさんと橘さん、ブランさんの事も気になったが、カナコさんは彼等
とはだいぶ状況が違う。十二歳でゼヘナに転移し、記憶を失った状態で五年という日々を
過ごした。私にとっても彼女の存在は大きく、ミズキさんという友達もいた。記憶を取り
戻したとはいえ、改変後の配置が地球になる保証はない。誰の記憶にも残っていない状態
でゼヘナにいたとしたら、見つけないと――そんな心配をしていた。

けど、杞憂きゆうだった。

「……………良かった――」

やみひめさんと出逢い、訓練をしたりもした、私にとって思い出深い運動公園。

たちばな 橘さんと並んでベンチに座り、対面しているやみひめさんをあしらっている様子

のカナコさんは、とても幸せそうに見えた。

彼女はカナコ・T・シングウジから橘カナコに戻ったのだ。

最初からそうであったように。

「……………」

本当に良かったと思う。だけど、カナコさんが私やミズキさん、ゼヘナで過ごした時間よりも橘さんを選んだのが、少しだけ複雑だった。もちろん、私が知らないだけで、他にも地球での暮らしを選んだ理由はあるのかもしれない。

でも、それでも――

選んでほしかったな……。

「みんな、幸せそうだね」

「そうですね。彼が両手に花状態なのは業腹しゅうはらですが……右でも投げてやりましょうか」
冗談だとは思いますが、投げるものを探すタオエンさんを止め、私達は帰る事にした。

私が地球に転移し、ゼヘナに帰還した事実は変わっていない。その記憶も私には残っているし、ファフロウ姉妹も同じだ。けど、カナコさんがいる以上、やみひめさんと橘たちばなさん、そしてブランさんにとって、私は最初から地球に来なかった事になっている可能性が高い。

だったら長居は無用だ。下手に接触しない方がいい。

今の彼等の幸せを壊したくない。

さようなら、皆さん。

皆さんは覚えていなくても、お世話になった事、私はずっと覚えています。

ありがとうございます。

出来れば、そうお伝えしたかったです。

「――ねえ！」

公園の出口が見えた頃、背後から声をかけられた。

「え………?」

私は思わず振り返った。

「えっと、人違いだったらごめん。あのさ……何処かで逢ったことないかな?」
長い黒髪をポニーテールにした少女は、緊張した様子で言った。きっと勇気を出してく

れたのだろう。こんな質問、普通はなかなか出来ないと思う。

「……………。いえ、ないと思いますよ」

「そっか…………。あはは。ごめんね、変なこと言って」

「気にしないでください。でも、もしご迷惑でなければ、私からも変なお願いをしても構いませんか？」

「え？ いいけど…………」

「実は私、これからこの町を離れるんです。とてもお世話になった人がいて、でも事情があつて、その人にお礼もお別れも言えなくて」

「そうなんだ…………残念だね」

「はい。なので、代わりに貴女あなたに言わせてもらえませんか？」

「えっ!? でも……………うん、いいよ。私でいいなら」

「ありがとうございます。では——」

「う、うん…………」

「——ありがとうございました。お元気で…………」

「こちらこそだよ。ツバキも元気でね！」

私の自己満足に付き合ってくれた黒いポニーテールの少女——やみひめさんに会釈えしやくをし、私は足早に出口に向かった。

「すみません、お待たせしてしまつて。それに、接触してしまいました…………」

待っていてくれたファフロウ姉妹に感謝と謝罪を告げる。特にやみひめさんに変化はなかったと思うので、問題はないはずだが。

「…………。ねえ、ツバキちゃん。やみ子ちゃんに名乗ってないよね？」

「え？ もちろん…………あっ!?」

ベアトリーチェさんの言葉にはつとずる。あまりに自然だったため気付かなかったが、やみひめさんは最後に、私を『ツバキ』と呼んだ。

慌てて振り返ると、もう其処そこにやみひめさんの姿はなかった。

「どうします、ツバキさん？ 確認しに戻りますか？」

「…………。確認、しないといけませんか？」

「問題があるようには見えませんでしたから、しないといけない訳ではありませんが」
タオエンさんは、私に判断を任せてくれるようだ。

「なら、このまま帰ります」

やみひめさんが私の事を覚えてくれている——かもしれない。
せめて、そう思わせてほしかった。

機獣少女ゾイカルやみひめ (終)

あとがき

どうも、流遠亜沙るとおあさです。

『ゾイヤミ』エピソードをお届け致します。

ここまで来るのに七年強という時間を費やしてしまいました……。

本当なら一年かからない予定で、第一部で終わらせておけば、それでも二年で済みました。第二部の後半で欲張って、風呂敷を広げすぎたのが原因です。そして、時間をかけただけの結末になっているかと問われると、自信がありません。

正直、完結させるのが優先で、無難な結末になっている気もします。

それでも、登場キャラクターはどれも愛着が持てているので、終わらせてやれて良かったと感じています。

次回作を書くに当たって、本作の経験はかなり得るものが大きかったように思います。広げすぎ、よくない。設定と記録、大事。

良きところで謝辞を。

まずは最後まで監修という形でお付き合いくださった紙白さんに感謝を。クラウを始め、第二部から登場のロゼットとアニス、そしてライカさんとバナラちゃん、アエラやメガミデバイスのメンバー、本当にちよつとだけでしたがハントリンとファルナ先生と、大変お世話になりました……！

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に最後の感謝を。

ここまでのお付き合い——ありがとうございました！

2021 / 9 / 15 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女イカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る